中米のナワ系言語

―植民地時代の多言語社会におけるリンガ・フランカから消滅の危機言語へ―

五十嵐　公子

本論文は、植民地時代の中米グアテマラ総監領南部（現在のエルサルバドルに相当する地域）で話されていたナワ系言語の一言語変種であるピピル語について、言語学的特性の解明及び歴史学的・社会言語学的背景の考察を試みるものである。ナワ系言語は多言語社会のヌエバエスパーニャの広い地域でリンガ・フランカ（共通語）として機能していた。しかし、ピピル語は、植民地時代、独立後の近代国民国家形成の過程、さらに長期の内戦時代を経た現在、消滅の危機に瀕している。

本論文では、エルサルバドル西部のサンタ・アナ市大聖堂所蔵の『サンタ・ベラクルスのコフラディア台帳』（以下『台帳』と略記）を取り上げ、調査・研究を進めた。『台帳』には、17 世紀から 18 世紀にかけての同コフラディアの運営規則や幹部任命録などが収められており、その中には、ピピル語で記された歴史資料としても言語学資料としても貴重な文書が確認された。

古典ピピル語研究の歴史はまだ浅いため、文書の解読には、『台帳』が作成された時代の社会や言語状況を把握することが不可欠である。本稿では、地理報告書や教会巡察記録などの文献から、先住民に関する歴史学的・社会言語学的背景を読み取るとともに、『台帳』がどのような目的で作成されたかを考察した。次に、『台帳』の全テキストを起し、ピピル語テキストの形態統語論的分析を行い、名詞（句）と動詞（句）などの特性を見出すとともに、スペイン語からの借用語や語彙の変化などにも留意しつつ、解読を進めた。

さらに、長い歴史を経て、危機言語となった現代ピピル語の言語学的特徴、特に、スペイン語の影響による言語変容の具体用例を示した。また、20 世紀以降、エルサルバドルで実施された人口調査や国勢調査に見られる先住民政策及び社会言語学的状況の変遷を分析するとともに、言語・文化の保存と復興に向けての政府及び関係機関による近年の取り組みを紹介した。

最後に本研究の総括として、植民地時代のピピル語の言語学的特性についての現段階での見解を述べるとともに、多言語社会におけるリンガ・フランカとしての社会的役割についてまとめた。さらに、現在では消滅の危機言語となったピピル語の保存・復興の展望について言及した。

第１章では中米のナワ系言語に関する先行研究を提示した。中米は長期にわたる内戦のため、言語学的調査・研究は少なく、また、副王領の中心地であっ

たメキシコやペルーと比べると史料が限られることから、歴史学・民族歴史学的研究の歴史もまだ浅い。この章では、本研究を進める上で、しばしば参考としたキャンベルの現代ピピル語研究及びデイキンによる、16 世紀末グアテマラにおいて、リンガ・フランカとして機能していたナワ系言語文書の文献学・言語学的研究を概説し、本研究の位置付けを示した。さらに、植民地時代のナワ系言語に関する社会言語学的状況の分析に有効な歴史学・民族歴史学からの代表的先行研究を概説した。

第 2 章では、植民地時代グアテマラ総監領の多言語社会の諸相と言語分布を概観するために、スペイン人による先住民言語に関する文献記述を分析した。その結果、ナワ系言語は先スペイン期から広域商人の活動やメシーカ王国拡大とともにリンガ・フランカとして広く通用していたことが検証された。また、征服後の中米においては、スペイン軍に同行の後、残留したトラスカラ人などのナワトル語も加わり、スペイン人統治者と様々な言語を母語とする被統治者（先住民）との間で、リンガ・フランカとしての役割を担ってきたことが明らかとなった。

第 3 章では、ピピル語の言語学的特徴、特にナワトル語との差異に関する植民地時代の文献記述を示すとともに、ナワ系言語におけるピピル語の言語分類学的位置付けを示した。また、植民地期早々から、ナワ系言語のリンガ・フランカとしての機能が布教活動に利用され、文法研究や辞書の編纂が盛んに行われた。この章では、17 世紀末までの言語政策とナワトル語研究史を概観するとともに、本論文で取り上げる『台帳』の古典ピピル語解読にも大いに依拠した古典ナワトル語文法を概説した。

第 4 章では、『台帳』が記された舞台であるグアテマラ総監領エルサルバドルの多言語社会とコフラディア（信徒集団）について、16 世紀末と 18 世紀の地理報告書や教会巡察記録などの記述を中心に考察した。18 世紀の記録には、各教区の先住民、スペイン人、さらにラディーノ（メスティーソ）などの民族別人口、先住民のスペイン語化の状況が記されており、大都市においてはスペイン語とのバイリンガルがかなり浸透していたことが伺える。

一方、コフラディアは、先スペイン期からの先住民的な伝統的宗教儀礼組織に代わる村落自治の中心的機構として、先住民の間に浸透していた。17 世紀グアテマラ司教区では、遠隔地におけるコフラディアが増加し、聖職者がコフラディアの管理・運営を通じて不当に蓄財を増やしていたことが問題となっていた。その取締まりのため、コフラディア運営の記録が義務づけられた。『台帳』もまた、このような状況を鑑みて記録されたと考えられる。

第 5 章では『台帳』のピピル語文書のテキストを提示するとともに、言語学的分析を示した。『台帳』の中で、最も重要な文書は、1666 年にグアテマラ司教

区長リベラ司教によって、サンタ・ベラクルスのコフラディア設立が許可された際、言い渡された訓令（以下「リベラ訓令」と略記）である。このコフラディアの成員はピピル人であったため、スペイン語原文からピピル語に訳された文書が残されている。

テキストの言語学的分析にあたっては、原本を現地でデジタル撮影した画像からテキストを起した。植民地時代のピピル語文書は未だほとんど発見されていないため、解読には古典ナワトル語解読に使用される辞書や文法書、言語学研究、ならびに現代ピピル語研究を参考にした。ナワ系言語は複統合語であるので、テキストの形態統語論的分析を行った上で仮訳し、音素、名詞（句）、動詞（句）、語彙の特徴を中心に、具体的用例を上げ、古典ナワトル語との比較分析を行った。

音素に関しては、現代ピピル語同様、ナワトル語の/W/や/u/が/γ/に対応し、また、ナワトル語に特徴的な二重子音/tl/は/t/となっていることが確認された。

名詞（句）の形態素については、単数名詞語尾は-t（ナワトル語：-tl）が確認された。また、複数名詞は、現代ピピル語でよく使用される語頭の反復や接尾辞の-met はみられず、-tin のみが確認された。

動詞（句）の語幹の後に表れる時制接辞の特徴としては、「訓令」という法的性格のためか、過去時制はほとんどみられなかった。現在時制は、ナワトル語や現代ピピル語とほぼ同じである。現在完了に相当する単数主語形態素（接尾辞）としては、-ta が見られた。また、訓令のため、未来時制の用例は多く、単数主語形態素（接尾辞）としては-s、複数主語形態素（接尾辞）としては-squete が確認された。

古典ナワトル語動詞（句）によく見られる動詞語幹に後置される受身、要因・使役を表す形態素については現段階では不明であった。この他、統語論的分析においては、各名詞が、主語か目的語かという判別が困難であり、単語間の関係性を表す不変化詞も不明な部分が多く、これらの点については、今後さらに他の文書の解読が進む中で明らになると思われる。

語彙分析の結果、「リベラ訓令」のピピル語テキストにおいては、植民地統治によって導入された新しい概念が、スペイン語からの借用語として導入され、また、ピピル語とスペイン語の混合表現も少なからず見られることが判明した。例えば、先住民が重要視してきた尊敬の接尾辞-tzin は、スペイン王とキリスト神には見られるが、コフラディア役職名としても使用される植民地体制の役職名や聖職者の役職名には見られない。また、コフラディアの金庫を管理する帳簿（*libro*）は、to uei *libro*（我らの‐古き尊敬すべき‐帳簿）と、ナワ系言語の敬意を表す形容詞が付けられていた。それらの用例には、ナワ系言語本来の複統合語的性質を利用して、司教区本部の意図が巧みに組み込まれたと推察

される。

第 6 章では、現代ピピル語の言語学的特徴、特に、スペイン語の影響による言語変容について、ピピル語民話テキストや筆者が行った現代語調査から具体的用例を上げ考察した。その結果、かつてはピピル語であった一部の身近な名詞や動詞までスペイン語で導入されている他、スペイン語の接続詞や関係詞を用いて長文を形成していることが確認された。

さらに、エルサルバドルで現在まで実施された人口調査や国勢調査に見られる先住民政策と社会言語学的状況の変化を考察し、ピピル語が消滅の危機言語となった歴史的、政治的要因と照合し分析した。その結果、隣国グアテマラの動向が少なからず影響を与えていると推察された。最後に、近年盛んになってきた、先住民の言語・文化の保存・復興に向けての現政府及び関係機関の取り組みについて述べた。

以上のような研究から、古典ピピル語の言語学的特性について、言語構造の根幹である名詞（句）及び動詞（句）の特性が確認されたと言える。なお、不変化詞や統語上の特性については、現段階では不明な点が残り、この点に関しては今後の課題としたい。

文献記述などの分析から、『台帳』は、当時グアテマラ司教区遠隔地におけるコフラディア運営上の不正を取り締まる目的で作成されたと推察される。「リベラ訓令」などのピピル語訳テキストの解読から、複統合語的性質によって、スペイン人統治者が導入した新しい概念を受容した用例が確認された。このような特性によって、統治者とスペイン語を解さない被統治者の間でも、リンガ・フランカとしての役割を担っていたと考えられる。

独立後の近代国民国家形成の過程で、先住民の歴史ある言語や文化は社会の周縁に追いやられ、かつては、リンガ・フランカとして一定の機能を果たしていたピピル語は、その機能を公用語となったスペイン語に奪われ、少数言語となっていった。しかし、2007 年、同国史上初めて、民族名を質問項目に加えられた国勢調査が実施され、それによって少数民族の存在を広く社会に認知させた意義は大きいと言える。消滅の危機に瀕する言語の再生は極めて困難ではあっても、その無形文化遺産としての価値への社会的認識が高まったことで、先住民文化の保存・復興活動の進展が期待される。